



生活・文化・伝承





主な内容

お見立てのえのき榎の木
上堰の揚水
御嶽社の宝剣
天然寺の千手観音縁起

「お見立ての 榎の木」

木島平村の主な伝承説話については、木島平村誌や『木島平史話』（昭和 41 年刊）、『木島平村内の伝説と史跡案内』（昭和 57 年再版）に紹介されています。それらから穂高、往郷、上木島それぞれに伝わる話を三話掲載します。

小見の地にカイキリと呼ばれる字があります。大昔のこと、そこには数百年も年を経た榎の大木がそびえ立ち、それは見事な古木でした。

ここに小菅山の祭神が、白馬にうちまたが跨ってこの地に降り立ちました。榎の大木に登り、小菅山の奥の院をお見立ての上、御安居なされたといひます。榎の大木には馬の蹄の跡が、ありありと印されていました。

小見の地名は、御見立ての里といわれ、年久しくして小見と呼ばれるように変わったといわれています。

小菅神社の例祭には、小見の里人の参加なくしては、はじまらなかったという深い関係も、この由緒があるからだと言われています。

「薬師如来と順血散」

小見の木島太右衛門の数十年前のことです。ある夜、やくしによらい薬師如来が太右衛門の枕頭におたちになり「汝に靈薬を教えん、夢々疑うなかれ。」と…。その日、六部が托鉢に来ました。太右衛門はいつものように心から待遇し、そのうえ少なからずの食物を与えました。六部はたいそう感謝して、二法の良薬を教えて去りました。太右衛門は、一法の薬名がはっきりしないのに気づき、いそいで外にでて六部にたずねようとしましたが、不思議に、どこへ行ってしまったのか足跡さえ分かりませんでした。しかたがなく、薬名の分かった一法を調整し、薬師如来を安置して、順血散と名づけました。この良薬は、産前・産後はもとより、諸病に特効がありました。

この薬、後代、継承して家伝となりました。今なお遠近各所から、精神病や産前産後の血の道に、求めくる良薬とはこれです。

※残念ながら、現在は途絶えてしまいました。



「上堰の揚水」

計見新田の芝切百^{しばきりひやくしょう}姓は青木庄八で、夜間瀬の宇木の生まれです。堰掘りの名手としてその名も高く、元禄の頃、樽川から揚水する深沢堰、田上堰などを開いて、開発・開田の功労者でした。宝永年間に当地に移住したのですが、それ以前に上堰の開削に尽くし、ようやく工事が完成したので水を通そうと図りましたが、どうしたことかいつこうに水が揚がりません。さすが熟練妙手の庄八も思案にくれ困り果てます。やがて庄八は意を決したものの如く、ついに妻女の像を自ら描き、一心こめて新堰口に埋め、何やら口中に唱えました。と、あら不思議や、あれほどまでに通水を拒んだ新堰が、たちまちに音を立てて、うねりをあげて流れ下っていくではありませんか。

ちょうどそのころ、宇木の家にあつて機織にはげんでいた庄八の妻はとみれば、通水と時を同じくして、機織のまま突如、死を迎えたといひます。

庄八は深く妻女の死をいたみながらも感謝を惜しまず、それから毎日の忌日には寺僧（稲泉寺）を招き、法華経の転読を乞ひ、その冥福を祈ったそうです。六代の庄八、文政年中に上堰の水取り入れ口に、先祖の霊を弔うために、水護神の石碑を建て、里人ことごとく感謝し亡霊を拝したそうです。庄八のこの努力は、計見新田はもとより中村全域にわたり、多大の恩恵を今に与えています。

「御嶽社の宝剣」

大昔のこと、高貴の姫君が、わけがあつて当地に来て、大沢入りの妙義山付近に世をしのんで草案を構え、年を経てその庵でついに亡くなりました。

里人たちは等しく哀れに思い、姫とともに所持していた剣をその地に埋め、ねんごろに弔いました。

それから数百年を経た文化年間のことです。土地の所有者茂兵衛という者が畑を開墾したおり、一振りの剣が現われました。明かり晃々として一点の曇りない宝剣です。茂兵衛はそれを家に持ち帰り、深く蔵しておきましたが、その夜の夢に、「われは百足丸^{むかでまる}という宝剣である。今を去る数百年前、故あつて姫とこの地に来たり、姫みまかりの時、姫とともに埋められたものである。茂兵衛よ、よろしく神社もしくは仏寺に献納すべし。」と告げられました。

だが茂兵衛は、おしみてもあまりある宝剣なので、そのまま我が家の奥深く蔵しておきました。ところが、宝剣は毎夜のように百足虫と



「天然寺の 千手観音」縁起

なり、茂兵衛の夢の中にあられ、彼をおびやかしました。ついに耐えかねた茂兵衛は、長沢の御嶽社おんたけしゃの礎に納めたところ、大音響とともに宝剣もろとも礎の下に落ち入ってしまいました。しかし、茂兵衛はその後、怪しい夢におびやかされることもなく暮し、宝剣は今に御嶽社に祭られているということです。

上木島の天然寺には「前立ち観音」と呼ばれる千手観音菩薩像があります。(天然寺には、別に上田別所北向観音から分身として遷座された「厄除け観音」があり、7年一度御開帳が行われています。)以下はその「前立ち観音」に伝わる『千手観音略縁起』によって現代語に要約したものです。

そもそも当山(浅草、貞源寺)で護持申し上げている千手大悲の尊像は高さ1尺5寸(約45cm)、恵心僧都えしんそうずの作で瑞巖微妙の尊容であります。その昔、比叡から世にお出ましになり、徳川家康公が護持仏として深く信仰していました。国が治まり、天下泰平の世になってから江戸の増上寺中興の観智国師ていげんじに賜り、その国師から貞源寺を開山した愚然大和尚ぐおんだいかしやうへ授与されました。愚然大和尚は、岡崎の東照寺のもと住職で、家康公と懇意の間柄でした。家康公が関東へ出府され、和尚のために城の近くに地所を下され、そこに寺を建立されました。そのため観智国師かんちこくしとも懇意となり、観音菩薩の尊像が授与されました。寺は観智国師の僧号…貞蓮社源誉ていれんじやげんよから貞源寺と名付けられたそうです。

その後代々、浅草の地でこの観音様をお守りしていました。ところが、第十二世了達上人がある時、菩薩の夢のお告げを蒙りました。その内容は、仏様が光を放ちながら、妙なる声で次のように仰せられました。

「我、比叡の峰を出でてから八百有余年、多くの人を救済する縁を持つことができた。この江戸の地に留まること二百有余年、この東国では、秩父坂東六十六の霊場多く、東都江戸も大小のお寺が集まって、老若男女が救済され、度生どしやうの縁えんを結ぶことは恵まれ



伝承・口承

ている。今や本師如来の鎮座の国から我と深い縁のある土地がある。そこに我を移すべし。都会の利済はもう久しくな^{へんび}った。辺鄙

の衆生を結縁し、本師如来の^{さいど}濟度を伝えようという誓いがある。

我は汝を捨てはしない。早く、早く。」

とお告げがありました。驚きの感涙が流れ、不思議な思いで過ごしていました。

そんな折も折、導きによって信州高井郡（ごおり）上木嶋村天然寺の住職上人からこの観音様の懇請がありました。霊夢の趣に従い申し上げ、いささかその縁起を記して尊像^{せんざ}ご遷座の証といたします。

時は、嘉永二年丙の二月

東都浅草新寺町貞源寺第十二世現住 法蓮社性誉無我空阿了達
謹んで記します。



主な内容

祭事

食事

山菜

山菜を採るときの注意

■祭事■

<道祖神>

1月15日の小正月の行事。

お正月各家で飾られていた、しめ飾りや、役目を終えたダルマを朝から子どもたちが集め、あらかじめ作られた「道祖神」に飾り付け、その前年に赤ちゃんの産まれた家から種火を貰ってきて、時刻を決めて点火し、13日に作っておいた物作り（作立ち）の団子を焼いたり、書き初めの紙を竿にくくりつけ十分に道祖神の火にあぶって焼いたりします。

その燃えかすが遠くまで飛んだ子どもは字がうまくなると言われています。またその火で焼いた団子を食べると風邪を引かないといわれています。また大町では大橋、平和橋に御幣を結びつけ悪鬼、邪気（主に流行病）の入らないよう祈っています。

<市神様>

中島、大町、中町集落には市神様とされる自然石にしめ縄を張った石が祀られています。この石の前で日を決めて市が立ちました。今のように近くに店の無かった時代、この市での売買が唯一他地域の物や、生活雑貨を手に入れる場でした。

今、中島では地区の役員が様々な物品、特に魚介類や野菜、果物等仕入れて販売をしたり、遊び場を作ったりして地区を盛り上げています。

<十三夜参り（馬曲）>

旧暦の10月13日、馬曲地区では十三夜参りと称して子どもたちだけで子育て道祖神参りが行われます。紅葉の枝の先に提灯を付け、豆を持ってお参りします。



この十三夜は旧暦9月15日の中秋の月に対応する行事で、十五夜には芋（里芋または団子）を供えたのに対して豆を供え、月を拝んで解散します。

この他、物作り（作立ち）^{しょうぶ}菖蒲はたき（稲荷、和栗）や秋祭り（新嘗祭^{にいなめさい}）、山の神祭り（糠塚、馬曲）など特色在る祭事が、また区によっては庚申講、三夜講（二十三夜）戸隠講、^{みつみねこう}三峯講など伝統を重んじながら続けられています。

■食事■

<芋なます>

ジャガイモのデンプンを水で晒して除き、少々のおで炒りシャキッとした、歯触りに仕上げた岳北特有の料理で、特に嫁入りやお祭り、お葬式など大勢の人が集まる日に作った。今、人が集まるのは祭礼ぐらいで、作る人も少なくなったが、野沢菜漬けとともに、村の誇れる食文化です。



<えご>



えごは芋なます同様、人の大勢集まる時に作られた海草を原料とした食物です。今では北信一帯で食われていますが、往時は往郷、穂高、地区が中心で上木島地区に入ったのは、昭和30年代のことと思われます。海草のえご草を煮溶かして固めたシンプルな料理ですが、海無し県の長野県にまで到達した極めて珍しい料理です。えご料理そのものは日本海を臨む九州から北海道まで分布していますが、木島平まで到達したことは海産物を商う行商の人々がここまで入ったことを示しています。

<その他>

この他、正月の餅、桃の節句の菱餅、端午の節句の柏餅（6



月) 田植え煮物 (6月)、田植えが終わった時の笹餅 (7月)、お盆焼き餅 (おやき・8月) 刈り取りが終わった時のぼた餅 (おはぎ・10月)、季節や行事毎に様々な料理があります。

■保存食■

<凍み大根>

秋の内に葉ごと取り入れておいた大量の大根の一部は、葉を付けたまま軒先などで干し、干しあがった物は葉を切り落とし、糠漬のたくあんにし、落とした葉は馬や牛などの家畜の餌として大切に保存しました。漬けなかった大根、野菜類は室 (穴蔵) や畑に藁などで覆い土をかけて冬に備えました。

1月下旬から2月上旬、寒さが一段と厳しくなる頃取り出し、皮をむいて茹で、藁を通して軒先に下げ凍らせました。大根は凍る、融けるを繰り返す、次第に水分が無くなりひからびた状態になります。これを保存し春、田植え煮物などの材料としました。

この他、春のぜんまいは干して保存し、必要な時に必要な量を水でもどして使いました。田植え煮物には欠かせない材料となります。大根も千切りにし、茹でて干して切り干し大根にし、野菜の無い春先の貴重な食材となります。

<漬け物>

秋、白菜、キャベツ、大根などの越冬用の作物の収穫が天候を見ながら急ぎ行われます。

野沢菜は霜が1、2度降りてから収穫をします。

大根はタクアン漬けに、野沢菜は野沢菜漬けにされます。タクアン漬けには、干し柿のように剥いた柿の皮や茄子の葉が、一緒に漬けられ、野沢菜は煮干しや昆布などを適当に混ぜながら漬けられ、冬の間大切な食料となります。

この他、柿は干し柿に、唐芋 (菊芋)、大根、ニンジン、などは味噌漬けにされ保存します。近年は竹の子など山菜も瓶詰め、缶詰などにし保存できるようになりました。また、きのこ類は干すか塩漬けにして保存されます。

■山菜■

山菜は山に雪の残る頃から、採取が始まります。

竹の子 (根曲がり竹) は採取したら、出来るだけ早い時間に調理をするとアクが出ず、春の味覚を味わうことができます。



●調理法

- ①採取したものを一本ずつ、先を斜めにそいで、根元から先に向かって切れ目を入れ、根元部分から皮をはぐ。
- ②むき終わったら、包丁で軽く切れる所を探して細かく切る。節は固いので注意して切り取る。(節抜き)
- ③細かくなった竹の子を水から煮込み、鯖の水煮缶詰をほぐして入れ(小さく切った豆腐を入れても良い)、味噌で味を整える。

竹の子の他、こごみ、わらび、ふきのとう、こしあぶら、たらの芽、あさつき、のびる、水菜、山うどなど多くの新芽を食べることができます。

ぜんまい、わらびは多少、アク抜きが必要となります。良く洗って、草木灰に一晩漬けてあく抜きをするのが良いですが、灰が無い場合は重曹でも良いです。

わらびは茹でて食べますが、ぜんまいは天日でカラカラになるまで干し保存食とします。

今はすっかり忘れられている、すぐり、桑の実、ぐみ、すいば(すいこ)、たけずいこ(たけかんぼ)、にせアカシヤの花、雪の下の葉、柿の葉、桑の葉、よもぎ、ふき、自然薯 山わさび(おかわさび)など、木の実や草も春から夏にかけての素朴な味です。

■山菜を採るとき の注意■

山菜は無限に有る物ではありません。山菜採りは次の年の事を考え、根なり新芽1つ2つ残して採取します。このマナーを守らないとその山菜は枯れてしまい、或いは芽を出すことができずに消滅してしまいます。きのこ類は必ず「びく」と呼ばれるかごで採取します。

その理由は、かごだと採取している間に、種となる胞子が落ちて何年か後にはそこに再びきのこが生えるからです。

栽培している果樹も秋、取り入れの祭、1つ2つ残します。これは神様への感謝の印であり、鳥たちの食べ物となって、農家の自然を敬う姿の表れだといえます。

名水火口そば

名水火口そばとは、地元産そば粉の使用を基本とし、環境省から平成の名水百選に選定された内山地区の龍興寺清水をはじめとした、木島平の豊富で清らかな名水を使用し、つなぎには北信地方でのみ独自に使われる貴重なオヤマボクチ（雄山火口）を使用した、風味豊かでのど越しが良く、噛み応えのある手打ちそばです。

（※オヤマボクチ：キク科ヤマボクチ属の多年草。葉の繊維を乾燥させたものが、そばのつなぎになる。）

【使用材料等】粉 1 キロ（そば粉 800g 中力粉 200g）、オヤマボクチ 2 g、熱湯 200cc、水 300cc
麺棒（延し棒 90cm：1 本／巻き棒 105cm：2 本 いずれも直径 3 cm）

粉を混ぜる～水回し



振り通した粉を混ぜ、熱湯（200cc）で溶いたオヤマボクチ（2g）と水（200cc）を同時に入れます。箸で手早くかき混ぜた後、指先を使ってまんべんなく水分を含ませます。続いて 2 回目の水回し（80cc 程度）を同様に行い、3 回目は 2 回目の様子を見ながら水を手に取り、全体にまぶした後、右下の状態になるまでかき混ぜます。

練る（菊練りまで）



全体の半分をまとめ柔らかさの加減を確認します。その際、固めの場合は残りの半分の水を加え馴染ませながら一つにまとめます。菊の模様のしわができるよう、生地を回しながら練り込んでいきます。

へそだし



菊練りの出来た生地を鉢の形状を利用して転がしながら、しわから空気を抜いていきます。出来たそば玉を上から押しつぶし平らにしたところでナイロン袋に入れて一時保管、延しを行うための準備作業間の乾燥を防ぎます。

延し（地延し・丸出し・四つ出し・肉分け）



地延し…生地を取り出し、打ち粉を振り、中心から外に向かって均等に延していきます。（目安：直径 25 cm 位）
 丸出し…再度打ち粉を振り、のし棒を使って生地を中心から外側に向かって 2 時・12 時・10 時の順で円を広げるよう均等に伸ばしていきます。（目安：直径 50 cm 位）
 四つ出し…生地を巻く前に中央（縦）に打ち粉を振ります。丸めた生地を手前に引き寄せ、手のひらで麺生地を抑えながら前方に転がして延します。180 度向きを変えて、同様の工程をひし形になるまで延していきます。（目安：70 cm 角位）
 肉分け、幅出し…四角になった生地の一辺をのし棒で 3 分の 1 程度巻き、幅が 80cm 程度、厚さが均等になるよう生地の手前から外側に向かって 2 時・12 時・10 時の順で左右の角を広げながら、上辺が平行となるよう伸ばしていきます。

延し（本延し・たたみ）



本延し…巻き棒を2本用います。生地を半分ほど広げ、幅を変えずに生地全体の厚さが2mm程度となるよう、手前から奥に向かって上辺が平行となるように伸ばしていきます。半分ずつ棒に巻き取り、均等に行います。

（目安：生地全体の大きさ 80 cm×100cm）

たたみ…厚さが均等となったところで、生地を半分広げ、まんべんなく打ち粉を振ります（打ち粉が振り足りないと、包丁で切った際にそばがくっつきます）。その上に残りの半分を重ねます。同様の工程（打ち粉を振って半分に折る）を2回行います。

切り



まな板に生地より大きく、少し厚めに打ち粉を延します。その上に生地をのせ、打ち粉を振ります。（この時点で打ち粉を使い切ります。）

こま板で押さえて最初に端を切り落とします。左手はこま板の端のまくらから5cmほど離して押さええます。包丁を手前から前方に押し出すように切ります。切った後、包丁で板を左側にずらして次の麺を切るための幅を確保します。（目安：幅約2mm位）

30回～40回程度（目安）切ったら一まとめにし、麺を左手ですくい取り、まな板に叩きつけるようにして手前の打ち粉を振り落としします。その後、右手に持ち替えて同様に打ち粉を振り落とし、容器に並べます。（上下1回ずつ行います。）

※目安については、標準的な数値を表示しています。自分の好みに合わせて調整してください。



米作り 昔と今

	昔	今
田おこし (たあおこし)	水田を耕す際の農具は主に備中鍬（ビッチョ）が用いられ、前年の稲の切り株を、一人で約1m間隔に耕しながら前に進んだ。二番耕しは最初に耕した土塊をさらに細かに砕きながら耕す作業であった。昭和15年頃には馬や牛に犁をひかせる馬耕が行なわれていた。	小型トラクターに耕す器具を取り付け、手動操作で歩きながらの田おこしから、耕地の区画整備が進むとともに、耕運機も大型化され、乗用トラクターによって大面積を一気に進められるようになった。
代かき (たあかき)	水田に灌水をして、耕土が十分軟化した時タアカキをする。馬のあごの下にハナドリ用の棒を結び付け、後方にはマンガを付けて馬(牛)に引かせ、耕土を泥土化すると共に水田の表面を平にした。また、水洩れがないように人手によって泥土のアゼヌリを行なった。	水が張られた田んぼに大型機械が入り、土を掻きながら表面を平にする作業が一挙に進んでいく。畦の整備も簡単に塗り土ができる専用の機械が造られている。
筋蒔き	田の中に苗床が作られて、筋状に種（稲粃）が蒔かれる。保温のために苗床の上に帯状のシートがかけられ稲の生長が促された。	機械植えに合わせた苗箱が用意され、そこに適量の植え土が盛られ、筋が蒔かれる。その過程は総て機械化されている。作られた苗箱は水張りのできる田んぼに並べて育てられる。
苗だし	苗が一定の長さに育つと、手植えのために苗床から苗を抜き、一定量に縛りまとめた苗束が用意され、田植え時に各田んぼに運ばれた。	
田植え	泥土が落ち着いた時点で田植えが行なわれ、6月6日から20日頃まで続いた。一番中心に盛大にする田植えをオオダウエと呼び、ご馳走をした。タウエムスビや山菜昆布巻きの煮物等を小昼（コビレ）として振舞われた。	手植えから機械植えに変わり、その機械も歩きながら操作するものから乗用で何条も一気に植えることができる田植え機へと進んでいる。
馬鍬洗い (まんがらい)	家の田植えが全部済んだ日に特別のご馳走をした。餅を搗き、笹餅は神棚へ、あずき餅は仏壇に供えた。また他家へ出た子供達へは笹餅を配って回った。	田植えの日数も機械化によって少なくなっているが、労をねぎらい、収穫を願う習慣は残り、春祭り行事等にも繋がっている。
田の草取り	水田の除草のことをタノクサトリといい、人手によって苗の株間の土を掻きながらはっていく作業であった。一番草は田植え直後10日～15日頃、二番草は7月15日頃とコンバンクサまで取った。田植えと同様に「結（エ）」と呼ばれる助け合いの仲間で主に行なわれた。昭和10年頃から手押しの除草機が普及した。	除草薬の進歩によって、人手による田の草取りの姿は、今はほとんど見られない。



米作り 昔と今

	昔	今
稲刈り	親戚や近所の人などお互いに親しい者同士で「エ」を組んで手作業で稲刈りをした。刈り取った稲は1把ごとに束ね、それをハゼに干した。	現在では、稲刈りから脱穀まで、コンバインによって一緒に作業が行なわれる。籾状になった米がそのまま運ばれて、乾燥機にかけられ自動温度で調整される。
ハゼ(ザ)かけ	ハゼは1、2段のものから7、8段のものなど、地域や地形によって異なっている。ハゼ棒は杉の棒を縄で結って組み立てる。	
案山子	水穂期近くになると、人の形をしたカカシを田の中に立てた。着物としてボロを着せておいた。	
ぼっち	六把ずつスナエで束ね、脱穀前に霜や霧で稲が湿るのを防いだ。	
脱穀	旧来、千歯ごきによる脱穀作業が行なわれていた。大正後期に足踏式回転脱穀機が考案され、さらに、動力応用の原動機使用へと進んでいった。電動機は大正末期に市販されたが、その頃は一部の農家で導入されるのみであった。一般に水田などの外で行なわれる脱穀は、朝暁から行なわれたが、家で行なう時はヨナベ仕事としてであった。作業場所も田の中や家の庭、作業所など様々であった。	
精米(米搗き)	水量の多い所では水車を使い、少ない所ではバッテリーを使って米を搗いた。後には電気による精米機を組で共同管理し、また農協などの精米所で精米するようになった。	精米機の機能も性能も向上し、大量の籾が白米へと無駄なく選別され、袋詰めまで進められる。



昔の遊び

主な内容

だるまさんがころんだ
お手玉

遊びは大きく分けて、屋外と屋内、戸外でも屋内でも遊べる遊びに分けられる。

(1) 屋外

石蹴り（ケンケンパ）、陣取り（釘とうし）、缶蹴り
鬼ごっこ、竹馬、竹スキー、竹とんぼ、水鉄砲
手つなぎ鬼、木登り、縄跳び、大縄跳び、しみ渡り
そり遊び、雪合戦、魚取り、水遊び、首飾り、虫採り 等

(2) 屋内

馬跳び、おはじき、お手玉、あやとり、折り紙
紙鉄砲（折り紙）、紙相撲、ずいずいずっころばし
カルタ、福笑い 等

(3) 屋外、屋内

紙飛行機、割り箸鉄砲、杉鉄砲、紙鉄砲
だるまさんがころんだ、かくれんぼ、ゴム跳び
まりつき、パッチ（めんこ）独楽、ビー玉
かごめかごめ、凧揚げ、羽根つき 等

■だるまさんが ころんだ■

＜遊び方＞ ☆人数が多いほどおもしろい

- ①じゃんけんで一番負けた子が鬼になる。
- ②木や柱など顔を付けられる場所で、木や柱に顔を付け、目を閉じて「だるまさんがころんだ」を鬼の自由な速さで唱える。唱え終わると同時に向き直る。鬼以外の子は唱えている間にできるだけ鬼に近寄る。鬼が唱え終わり向き直る瞬間に動きを止める。
- ③鬼は体の動いている子を探し名前を呼ぶ。
- ④呼ばれた子は鬼と手を次々につなぐ。



昔の遊び

■お手玉■

<遊び方>

- ①親玉を決めそれを投げあげている間に様々な技（お手のせ、おさら、トンネル、橋）や使用しているお手玉の数を競った。
- ②歌に合わせてお手玉を投げあげどこまで続くか競った。

<お手玉歌>

一番はじめは 一宮
二は日光 東照宮
三は佐倉の 宗五郎
四は信濃の 善光寺
五つは出雲の 大社（おおやしろ）
六つ村々の 鎮守様
七つ成田の 不動尊
八つ八幡の 八幡宮
九つ高野の 弘法さん
十でところの 氏神さん

- ⑤これを最後の一人になるまで続ける。
- ⑤最後の一人は慎重に鬼に近づき、鬼が唱えている間に「手を切った」と叫ぶ。つながれていた人はできるだけ遠くに逃げる。
- ⑥鬼は切られた瞬間に「止まれ」と叫ぶ。逃げた人はその場で止まる。
- ⑦鬼はできるだけ近くの子までを、大股で「だ・る・ま・さ・ん・が・こ・ろ・ん・だ」と唱えながら 10 歩で近寄って触る。
- ⑧触られた子が次の鬼になる。触ることができなければ再び鬼になる。



主な内容

してはいけないこと
前触れ
願い

■してはいけないこと■

- ・山の神の日に山へ入らない。神様が木として数えてしまう。
- ・着物を後ろ前に着ると狐がおぶさる
- ・ご飯を食べてねころぶと牛になる
- ・水に湯を入れると逆さ水で縁起が悪い。
- ・カラス鳴きが悪いと人が死ぬ
- ・雨降り花を採ると雨が降る。
- ・蛇を殺すと雨が降る。
- ・一杯茶は縁起が悪い。
- ・夜口笛を吹くと泥棒が入る。
- ・元旦に寝坊をすると一年中寝坊になる。
- ・元日に掃除をすると金が貯まらない。
- ・へそを出していると雷にとられる。

■前触れ■

- ・ネズミがいなくなると火事になる。
- ・つばめが来なくなるとその家は火事になる。
- ・蛙の冬眠の浅いときは地震が多い。
- ・蛇の坂登りの夢を見ると金持ちになる。
- ・川の夢を見ると幸福になる。
- ・歩いている自分の前の道を猫が横切ると悪いことがおきる。
- ・初午の早い年は火事が多い。
- ・12月三の酉まである年は火事が多い。
- ・クシャミを2回すると自分が噂されている。

■願い■

- ・宵節句の日にショウブ湯に入ると蛇に咬まれない。
- ・天神様に上げた物を子どもが食べると物覚えが良くなる。
- ・道祖神の火で焼いた餅を食べると風邪を引かない。



しきたり・方言

- ・冬至にカボチャを食べると風邪を引かない。
- ・初物を食べると75日長生きできる。
- ・茶柱が立つと縁起が良い。
- ・歯の抜けた時には上の歯は縁の下へ 下の歯は屋根に投げると歯が早く生えて来る。
- ・箸を逆さに立てると客が早く帰る。
- ・旅行に出かける時、出がけに梅とお茶を飲むと無事帰る。

■方言■

あ	アキダッポ からっぽ アクト かかと アシタレ 足がだるい アタマクッダシ 始めから アライノケ 洗い除け アンバ さようなら	う	ウナウ (田畑を) 耕す ウソロ (動作が) 遅い ウッセ うるさい ウワッカ 表面 ウラチョンボ 先端 先つ穂 ウレマシ うらやましい
い	イギレル 蒸し暑い イジラカス からかってじらせる イビツ 形が不整形 イブリクセ 燻りの匂いがする	え	エー 結い エギナリ 突然 出し抜けに エゴデワリ 気持ち悪い エサーシ 忙しい
お	オーケン いいかげん オジゴンボ 長男以外の男子 オッポシヨル 折る オツツケ 直に すぐに オヘリヨ 褒美	か	カイシキ 皆目 全然 ガス 薄氷 カタル 子守 カラッキシ まるで、まったく カンシ ごめん
き	ギイラ ひ弱 キビシヨ 急須 キノーズ 気を遣わない ギョウサンネ おおげさ ギリ 間接	く	グッチャ ぬかるみ 泥道 クチイ (はらくち) 満腹 グネル ねじれる 筋がのびる クボッタマリ 水たまり クンネガエ 下さい
け	ゲーモネエ 無駄 ケダシ 門先の私道 ケツカル 居るの卑語 ゲット 烈しい 強い ケモウ みごと	こ	コーナル 体をかがめる ゴーロ 小石を積んだ所 ゴツタク 乱雑 ごたごた コツラ 軒先 ゴンジョコネル 泣いて無理を言う
さ	ササラクサラ さんざん サッキナ さきほど サブサブエボ 鳥肌が立つ サベル ものを言う サンザ たくさん	し	シコッテ 手に負えない ジックリに ずぶ濡れに シナグレタ しなびた シャル 退く さがる ショウシイ 恥ずかしい



しきたり・方言

す	ズクヤミ スダッキリ ズデコデ スベラッケ ズレー	骨惜しみ そうだけれど まるで 滑る 停滞しない おそい	せ	セウ セガス セッコイイ セツネ センドナ	物を云う 急がせる 精が出る つらい 苦しい 先頃 先だって
そ	ソッケネエ ソデネー ソノエト ゾンゼル ソツラコト	無愛想 尋常でない その内 あまえる さわぐ そのようなこと	た	タウエネエ タエソラシ タネ ダندان タゴマル	思慮分別がない おおげさに 臨時の池 溜め池 色々と 数々の 紐がもつれる
ち	チョメジョメ チャッチャト チャッチャ チョッキリ チンヤリ	小さくまとまった さっさと お父さん ちょうど 沈んでいる様子	つ	ツクダマル ツクナール ツケアゲ ツチミダ ツンノメル	しゃがむ しゃがむ てんぷら 地面 土間 前に倒れる
て	デーアル テッキ デンゴロ テズケ テンデに	長持ちする 頂上 頭上 大きな土塊 真っ先 最初 お互いに	と	ドウシラズ トウド トロップョウ ドンケツナシ トンマース	どうしよう 農作業の助っ人 むやみやたら 味が無い、薄い かき回す
な	ナエデ ナガラ ナジョシタ ナッチョダエ ナンダラカンダラ	難儀 くたくた だいたい 半ば どうした (加減は) どうですか 色々なこと	に	ニール ニガッコ ニネオケ ニヤガ ニョウ	逃げる 赤ん坊 担い桶 にぎやか 稲むら 薪集積所
ね	ネウセ ネセタ ネチャラッケ ネナグラ ネバシッケ	腐敗の匂い 発酵させた 粘っこい 冗談 ふざけ話 しつこい 粘り気	の	ノーテンキ ノクテ ノツナシ ノッパラスッパラ ノンベンダラリン	なまけもの 暖かい 仕事に力が入らない 超満腹 怠ける様子
は	バエツツル ハガエッタ ハラクチ ハルエダシ バンテンカーリ	(子供が物を) 取り合う はかどった 満腹 春の農作業始め (順番に) 代わる 代わり	ひ	ヒガラッペ ヒテメチ ビチャル ヒロットリ ヒンマシヤル	えぐみ (が有る) ひたい 捨てる 日当稼ぎ 曲がる
ふ	フーキドリ ブキッコ ブジギ フツテ フルエタチ	吹雪 不器用 自家用米 品不足 悪寒を伴う高熱	へ	ヘータラ ヘシテ ベト ヘバリツツク ベンコウマワル	やたら 一日 土 土地 張り付く 口達者



しきたり・方言

ほ	ハウテキ ホザク ボッチ ホドックベ ボボチャ	人が足を踏み入 れていない雪原 わめく 稲などを束ねて 立てた状態 (もの) いろいろで火を燃やす 赤ちゃん	ま	マンズ マクマク マゲ・マケ マダラッケ マテー マツベル マルゲル	ほんとうに 暗く 一族 もどかしい 実直 律儀 側に付き添わせる 束ねる
み	ミイヨ ミソテキ ミテグレ ミモヨモノエ ミソッチョ	稲わらの穂の部分 みぞれ 見た目 むごい つらい みそさざい (鳥)	む	ムギヤワリ ムギツケ ムセツケ ムカップラタツ ムショウニ	きまりわるい 露骨 無鉄砲 すごく腹が立つ めたらやたら
め	メエボコリ メツモナイ メツパツレ メノゴカンジョ	焚き火の舞い上がる灰 とんでもない 目の腫れ物 暗算	も	モウサ モウゾ モウラシイ モトガ モトーガ	よもぎ 妄想 寝言 気の毒 かわいそう 先日 以前 昔 はるか以前
や	ヤーガンネ ヤグナシイ ヤゲル ヤチ ヤブチジョウ	動かれない 粗悪なもの 嫉妬 谷地 低湿地 家族みんな	ゆ	ユキオロシ ユキババ ユテネ	降雪前の雷 雪の消え際に 発生する雪虫 風呂用手ぬぐい
よ	ヨグシタヨグシタ ヨコザ ヨシカ ヨテテル ヨラシ	子どもへ 手伝いの礼の言葉 囲炉裏で主人の座る場所 ひよっとして 得意である 寄って下さい	ら	ラッチモネエ ワエラ ワゲシヨ	とんでもない つまらない お前ら 若い衆

(資料提供 中町 仲山雄三)



観天望気

主な内容

天気が変わる
天気が良くなる
雨になる
雪になる
風が吹く

空や近くの山、遠くの山や景色の見え方、雲の動き、動物の仕草などから、お天気の変化を予想すること。お天気情報の無かった時代、農業をする上で大変重要であった。

■天気が変わる■

- ・とんびが出ると天気が変わる。
- ・鯉が跳びはねると天気が変わる。
- ・猫が後ろ足を立てると天気が変わる。

■天気が良くなる■

- ・猫が顔をこすると天気が良くなる。
- ・くもの巣に水があれば天気に（晴れに）なる。
- ・妙高山がはっきり見える時は、天気が良い。

■雨になる■

- ・蛙が鳴くと雨になる。
- ・猫が尻をなめると天気が悪くなる。
- ・かたつむりが木に登ると雨になる。
- ・斑尾山から来る雨は大雨になる。

■雪になる■

- ・尾長鳥が来ると大雪が降る。
- ・カマキリの巣が高いと大雪になる。
- ・高社山に3回雪が降ると次は里に降る
- ・雪おろしが聞こえるとそろそろ雪が降る。

■風が吹く■

- ・高社山に霧がかかれば、風が吹く。
- ・樽滝の雄滝が鳴れば、南風が吹く。

■その他■

- ・高社山の5月8日のウサギ雪を見たら種を蒔け。

